

今年度の総合教育会議における 協議振り返り及び協議成果について

令和6年1月29日(月) 教育委員会事務局教育政策課

- 1 今年度の協議総括について**
- 2 次年度の協議に向けて**

1 今年度の協議総括について

2 次年度の協議に向けて

- 昨年度に続き、教育大綱、教育振興基本計画の実現に向けた協議を実施

本市不変の方針「こどもファースト」

岐阜市教育大綱、岐阜市教育振興基本計画に掲げる目指す姿、基本目標の実現

に向けて、昨年度までの協議事項を踏まえつつ、更なる施策の検討・推進のための

協議を行う

1. 次年度に取り組むべき施策の具体化
2. 中長期的に取り組む施策の方向性・見通しの共有

1-2. 会議日程

● 今年度、以下のとおり計6回の会議を開催し、大綱実現に向けた**施策協議及び成果検証**を実施

回	日程・場所	協議事項	招聘者
1	5/26(金) 庁舎大会議室	遊びと学びをつなげる9年間を見据えた教育 幼児教育に関する取組状況と今後	田澤 里喜 氏(オンライン) 玉川大学教授
2	7/19(水) ぎふメディアコスモス	一人ひとりの子どもに深く向き合う教職員・学校組織 チーム学校の構築に向けた教職員のwell-beingを高める取組	妹尾 昌俊 氏 (一社)ライ7&7-7 代表理事
3	8/29(火) 庁舎大会議室	一人ひとりに寄り添った教育機会の確保 不登校児童生徒の社会的自立に向けて	棚園 正一 氏 漫画家・イラストレーター
4	10/16(月) 庁舎大会議室	地域で支える子どものスポーツ・文化芸術活動 休日の中学校部活動の地域移行に関する取組状況と今後	長沼 豊 氏 日本教育実践研究所 所長
5	11/13(月) 庁舎大会議室	未来を自ら拓く力を育む教育の推進(+授業見学) 「ぎふMIRAI's」の取組状況と今後	苫野 一徳 氏 熊本大学准教授
6	1/29(月) 庁舎大会議室	主体的・対話的で深い学びの実現 デジタル等多様な手段を駆使した学びの充実 年間総括(協議振り返り、協議成果)	—

第1回

【日時】 令和5年5月26日(金)13:30~15:30

【場所】 岐阜市庁舎 6階 6-1大会議室

【テーマ】 **遊びと学びをつなげる9年間を見据えた教育**

【招聘者】 **玉川大学 教授 田澤 里喜 氏**

【協議】 事務局説明

- ・本市における幼児教育の更なる推進 ~遊びと学びをつなぐ~
幼稚園、幼児教育課の現状の取組内容と、小1プロブレムの解消に向けて
今後重点的に進めていきたいと考える幼小連携の取組案について

招聘者説明

- ・遊びと学びをつなげる9年間を見据えた教育について

協議事項

- ・幼児教育の更なる充実
- ・幼小連携の推進 に必要な視点、取組について

1-3. 第1回（協議総括）

協議意見の要旨

- ・遊びの中で頭や心、体をめいっぱい動かすことが成長に直結している。
- ・遊びから学ぶことの重要性は、以前から言われているとおりである。
- ・幼小連携は、一過性の交流に留まるのではなく、組織として取組を継続するための仕組が必要である。
- ・体験的な接続ではなく、教育課程そのものの接続方法を検討しなければならない。
- ・幼小接続を考える上でのキーは、
 - ・目の前にあるリアルを五感を通して感じる事
 - ・時間の制限がないこと
 - ・探究のエネルギーである知的好奇心を持たせること である。
- ・小学校では、自発的に学ぶ力を身につけるために、幼稚園での学びを踏まえた発達段階に応じた実践をしていくことが大事である。

協議意見を踏まえた施策検討

●：具体的な施策(案) ○：今後の方向性、見通し

① 幼小連携事業の充実

- ・幼児教育施設と小学校がそれぞれの保育・授業を公開するとともに、教育内容や教育方法について研究及び協議する機会を設定

② 幼児教育に係るビジョンの改定

- ・幼小接続の重要性を踏まえ、本市の幼児教育に関するビジョンについて改定を実施

③ 架け橋期を意識したカリキュラムの作成を検討

- ・探究心を核として、幼児教育施設・小学校双方が同じ方向性を持って取組を進められる、幼小接続カリキュラムの作成を検討

第2回

【日 時】 令和5年7月19日(水)13:30~15:30

【場 所】 ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオ

【テーマ】 一人ひとりの子どもに深く向き合う教職員・学校組織

【招聘者】 (一社)ライフ&ワーク 代表理事 妹尾 昌俊 氏

【協 議】 事務局説明

- ・働き方改革から働きがい改革へ
教職員のウェルビーイングを高めるための取組案について

招聘者説明

- ・教職員のウェルビーイングを高める学校づくりと教育政策

協議事項

- ・教職員のウェルビーイングを高める取組を推進していくにあたり必要な視点について

1-4. 第2回（協議総括）

協議意見の要旨

- ・ 学校の健康診断を通して業務の仕分けと改善を大胆に行った結果、時間外在校等時間は、岐阜地区で最も短くなった。これは大きな成果である。
- ・ 働き方改革と働きがい改革は両輪だという点は、まさにそのとおりだ。
- ・ 教員は弱音を吐いてはいけないという雰囲気があると思うが、困ったときは誰かに相談し、一緒に解決してもよい。
- ・ 研修に限らず、集まって話すことができる場や相談し合える場がもっとあるとよい。
- ・ 子どもたちの育ちが一番ではあるが、子どもたちが生き生きと学ぶためには教員が生き生きとしていなければならない、ということが我々の共通認識だと確認できたように思う。
- ・ 休憩室や食堂等、いわゆる仕事から離れた時間を過ごせる空間の充実は、これからの学校施設を考えていく上で必要な視点である。

協議意見を踏まえた施策検討

●:具体的な施策(案) ○:今後の方向性、見通し

- | | |
|-----------------------------------|---|
| ① 働きがいのある職場づくりを推進する
研修の実施 | ・教職員が働きがいを感じ、生き生きとした姿で子どもたちと向き合える職場づくりに資する研修の実施 |
| ② オンラインを活用したコミュニケーション
の場の創出を検討 | ・コミュニケーションツールを活用し、時間や場所に囚われず、教員が気軽に相談や質問、情報交換できる場の創出を検討 |
| ③ 指導主事による教職員サポートの取組
充実を検討 | ・学校・教職員の困り感に対し、指導主事が共感的に傾聴し、適切な支援を行うサポート体制の充実を検討 |

第3回

【日 時】 令和5年8月29日(火)13:30~15:30

【場 所】 岐阜市庁舎 6階 6-1大会議室

【テーマ】 一人ひとりに寄り添った教育機会の確保

【招聘者】 棚園 正一 氏(漫画家、イラストレーター)

【協 議】 事務局説明

・誰もが安心して学べる学校・居場所づくり ~誰一人取り残さない不登校対策~
これまでの不登校対策・不登校児童生徒への支援に関する取組状況と、
そこからみえてきた成果・課題、また不登校の要因を踏まえた今後の方向性
について

招聘者説明

・学校へ行けなかった僕の毎日が宝物と思えるまで。

協議事項

・誰もが安心して学ぶための学校・居場所づくりに必要な視点・取組について

1-5. 第3回（協議総括）

協議意見の要旨

- ・居場所があること、認めてくれる大人や分かり合える仲間がいることは、子どもにとって必須なことである。
- ・子どもの特性やエネルギー状態によって行ける場所は異なるため、多様な居場所を用意する必要がある。
草潤中学校や校内フリースペースに加えて、実証段階であるオンラインを活用した支援等を行うのはとてもよいことである。
- ・多様な学びの場、選択肢を用意するのが我々の役割ではないか。
- ・不登校の要因は本当に様々であるので、関係機関が総がかりで取り組んでいくことが必要である。
- ・子ども本人への支援だけでなく、不登校の子を持つ親同士のつながりも非常に大事である。
- ・学校の基本姿勢として、正解を探すのではなく、やってみて失敗し、そこから次の一步につながるものを学びとるという気持ちや姿勢を醸成していくことが必要である。
- ・公教育は、制度や仕組み、施設、人的配置等、様々なものがある程度決められているのだが、そこにどのようにして変動性を持たせるかが大事である。

協議意見を踏まえた施策検討

●：具体的な施策（案） ○：今後の方向性、見通し

① 多様な居場所の整備

- ・引きこもり傾向により、既に取り組んでいる多様な不登校支援策につながりにくい児童生徒のオンライン上での居場所を整備

② 校内フリースペースの充実

- ・地元の学校で過ごしたい、あるいは、学校・学級復帰を望む児童生徒のために設置している校内フリースペースを拡充

③ 草潤中学校の取組強化

- ・これまでの実績と課題を踏まえ、不登校児童生徒の実態に即したよりよい支援のあり方について検討

第4回

【日 時】 令和5年10月16日(月)13:30~15:30

【場 所】 岐阜市庁舎 6階 6-1大会議室

【テーマ】 **地域で支える子どものスポーツ・文化芸術活動**
～休日の中学校部活動の地域移行に関する取組状況と今後～

【招聘者】 日本教育実践研究所 所長 長沼 豊 氏

【協 議】 事務局説明

- ・休日部活動の地域移行に伴う教育的意義の継承
部活動が担っている教育的意義と抱えている課題、移行しつつある休日の地域クラブへ
教育的効果を継承していくための方向性について
- ・将来にわたり持続可能な岐阜市型地域クラブ
休日部活動の地域移行の現状、移行に取り組む中で見えてきた課題と今後の取組について

招聘者説明

- ・部活動の“地域展開”について

協議事項

- ・学校・教職員の休日の地域クラブへの関わり方について
- ・休日の地域クラブの安定運営に必要な指導者・活動場所確保の方策について

1-6. 第4回（協議総括）

協議意見の要旨

- ・部活動に熱心に取り組む教員の方には、地域移行後も大いに活躍していただけるとよい。大学と連携を図り、指導者の確保・育成の取組をさらに進めることが必要である。
- ・指導者を確保するための人材バンク構築は、着実に地域移行を進める上で必要なことである。
- ・地域移行に伴って子どもたちに関わる人は増える。そうした方々の質の担保も大事である。
- ・中学生の成長に大きく寄与してきた部活動の地域移行に伴い、例えば必修クラブの復活等、一人ひとりのよいところを伸ばせるプログラムが学校に必要となるのではないか。
- ・生徒が主体的に過ごし方を選択できるよう、地域クラブも個別最適化が必要である。ゆるい部活・地域クラブという選択肢があってもよいと思う。
- ・保護者のスタンスや各家庭の経済格差によって、スポーツや文化芸術に親しむ機会が奪われないようにする必要がある。

協議意見を踏まえた施策検討

●：具体的な施策（案） ○：今後の方向性、見通し

① 指導者人材バンクの設置

- ・地域クラブが持続的に指導者を確保できるよう、教員や関係団体、大学生等指導を希望する方を登録し、必要に応じて提示できる仕組みを構築

② 指導者確保に必要な環境整備

- ・地域クラブにおいて、専門的な実技指導を行える指導者を確保するために必要な環境を整備

③ 持続可能な地域クラブの在り方を研究

- ・子どもたちのニーズや地域の実情、有識者の意見等を踏まえ、持続可能な地域クラブの在り方について研究

第5回

【日 時】 令和5年11月13日(月)14:20~16:30

【場 所】 岐阜市庁舎 6階 6-1大会議室

【テーマ】 未来を自ら拓く力を育む教育の推進 ~「ぎふMIRAI's」の取組状況と今後~

【招聘者】 熊本大学 准教授 苫野 一徳 氏

【協 議】 事務局説明

- ・リアルを通して生きるをつくる ぎふMIRAI's
今年度開始した「ぎふMIRAI's」の取組状況とそこからみえてきた成果・課題について

招聘者説明

- ・何のための「探究」なのか? ~「自由」と「自由の相互承認」の実現に向けて~

協議事項

- ・ぎふMIRAI'sを推進するにあたり、より深い学びを実現するために必要な取組や学び方について

1-7. 第5回（協議総括）

協議意見の要旨

- ・「ぎふMIRAI's」は、自分の原点、足元を確かなものにするのが最終的なゴールになっており、まさに自分自身を価値ある大切な存在だと思えることに直結している。他者との比較ではなく、様々な体験の中で自分を知ることが大切であり、この学びの場こそが「ぎふMIRAI's」である。
- ・本物との出会いは、学校に来ていただくだけでなく、本場に行ってリアルに感じることも必要である。
- ・より深い学びとするためには、子どもたちが自発的に「こうしたい」という意思を持つことが必要である。1年目の経験を、いかに子どもたちの「やりたい」に繋げていけるかが大事である。各校でカリキュラムを作るにあたっては、その点を意識していただく必要がある。
- ・教員が負担を感じないためには、自分たちで企画して取り組む楽しさを実感することが大事である。一方で、指導案やカリキュラムをあまりにも細かくしてしまうと、それに子どもたちをあてはめようとしてしまうだろう。子どもたちの興味や様子によって、進む方向が変わっていくことを理解した上で、伴走者として見守っていくことが大事である。

協議意見を踏まえた施策検討

●：具体的な施策(案) ○：今後の方向性、見通し

① ポータルサイトの構築

- ・「人・もの・こと」に関するデータや多様なコンテンツを格納するとともに、各校の取組を発表・横展開できるプラットフォームをオンライン上に構築

② コンテンツ・体験的に学ぶ機会の充実

- ・様々な「人・もの・こと」に触れられるよう、資料や動画、チャンネルの充実を図るとともに、地域で活躍する人々と実際の仕事場等で出会う機会を引き続き提供

③ カリキュラム編成の推進

- ・コンテンツを活用したカリキュラム編成を推進するとともに、探究を核としたカリキュラム編成について研究

第6回

【日 時】 令和6年1月29日(月)13:30~15:30

【場 所】 岐阜市庁舎 6階 6-1大会議室

【テーマ】 (第1部) **主体的・対話的で深い学びの実現 ~デジタル等多様な手段を駆使した学びの充実~**
(第2部) **年間総括**

【協 議】 (第1部)

事務局説明

・今年度のGIGAスクールの取組状況と今後について

協議事項

・デジタルツールを駆使した多様な学びの姿について

(第2部)

事務局説明

・今年度の総合教育会議における協議振り返り及び協議成果について

協議事項

・今年度の協議成果及び次年度の協議事項について

1 今年度の協議総括について

2 次年度の協議に向けて

2-1. これまでの議論

● 教育大綱の具現化を図るため、諸課題について議論

○ これまでの経緯

令和元年度

いじめ重大事態発生

令和2年度

教育大綱改定

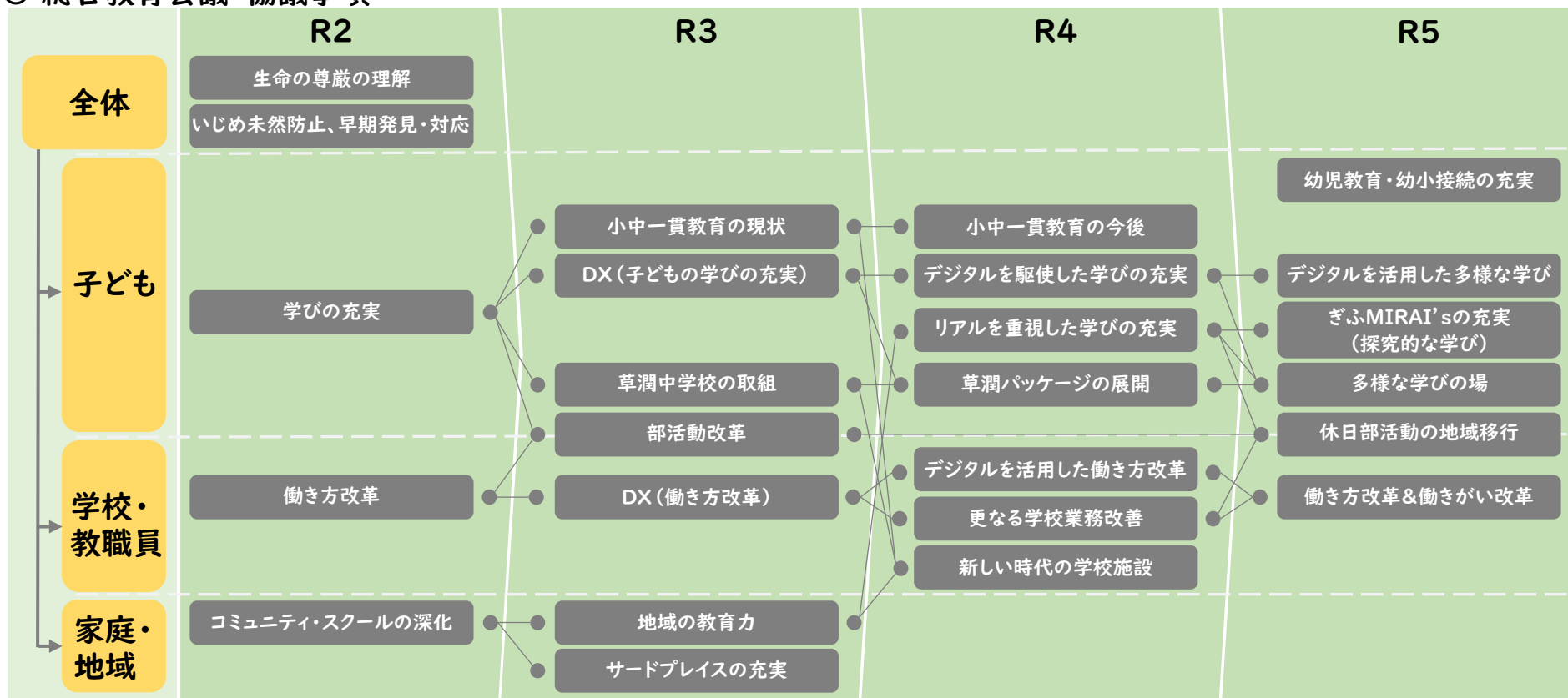
令和2～5年度

優先度の高い課題から議論を展開

- ・生命の尊厳の理解、いじめ関連
- ・教職員の働き方改革
- ・不登校

等

○ 総合教育会議 協議事項



2-2. 実現した取組

● 議論を踏まえ、着実に取組を具現化

○ 令和2年度以降に実現した主な取組

キーワード	取組
・生命の尊厳	生き方の探究学習、生き方の探究学習スーパーバイザー派遣
・いじめ	岐阜市いじめ防止対策推進条例改正、いじめ対策監・主任いじめ対策監配置、学校におけるいじめ未然防止等の取組
・安全安心な学校	市費スクールカウンセラー配置、ICTを活用した子どもの健康サポート導入、こどもサポート総合センター設置
・教職員の働き方	教職員の多忙化解消事業((株)ARROWSと連携)、保護者向け情報発信システム導入、採点支援システム導入
・不登校	草潤中学校設置、校内フリースペース設置、オンラインフリースペース実証
・未来を拓く力を育む教育 個別最適な学び・協働的な学び	ぎふMIRAI's、義務教育学校整備、コミュニケーションツール導入、学習支援ソフト導入、学びのOS転換、小規模校つながるプロジェクト
・コミュニティ・スクール	多世代参加

2-3. 次年度の協議に向けて

多様な視点から協議の充実を図る

- ・これまでの議論を発展させ、次の段階へ移行するための議論
- ・将来的な課題を見据えた議論

等



教育大綱の具現化へ

3. 論点整理

● これまでの説明を踏まえ、主に以下2点の事項について、ご協議いただきたい

① **今年度の協議成果** について

② **次年度の総合教育会議** において **協議すべき事項** について

遊びの中の学びについて

- ・ 幼児期においては、遊びの中で、頭や心、体を目いっぱい動かすことが成長に直結している。
- ・ 遊びから学ぶことの重要性は、以前から言われているとおりである。
- ・ 遊びを通して、好奇心だけでなく、周りの人との関わり方や集団で何かをするということも同時に学んでいた。

幼小連携について

- ・ 幼小接続を考える上でのキーは、
 - ・ 目の前にあるリアルを五感を通して感じる事
 - ・ 時間の制限がないこと
 - ・ 探究のエネルギーである知的好奇心を持たせること である。
- ・ 幼小連携は、一過性の交流に留まるのではなく、組織として取組を継続するための仕組みが必要である。
- ・ 幼児教育のエッセンスを小学校教育に取り入れていくことが必要である。
- ・ 幼児期の子どもは、何の指示もなく自ら遊びに没頭する。こうした本来持っている力をどれだけ伸ばせるかが小学校以降の課題である。
- ・ 体験的な接続ではなく、教育課程そのものの接続方法を検討しなければならない。
- ・ 公私、施設類型を問わず、どのような方針の下、教育を行っているかをしっかり把握した上で、連続性が生まれるよう地域ごとに考えていく必要がある。

幼児教育を意識した小学校での学びについて

- ・ 自発的に学ぶ力を身につけるために、幼稚園での学びを踏まえた発達段階に応じた実践をしていくことが大事だ。
- ・ 小学校において、本や生き物等、興味を持ちやすいものを日常に配置し、自ら学びに向かうきっかけづくりをすることも必要である。
- ・ 遊びに集中し、日々を満喫するためには、安全・安心感がなければならない。安全で安心できる環境をつくることができれば、前に進んでいく力は体の中から湧き起こるものである。まずは、大人がこうした環境をつくることが大事だ。
- ・ 小学校においては、子どもたちを取り巻く環境が突然変わらないようにすることが大事だ。
- ・ 型どおりの学び方をしなければならないという考え方から、この子は何をしたいのか、どのような学び方が合っているのか、一人ひとり見つけていくといった方向へシフトしていくことが必要だ。
- ・ 子どもたち自身が、遊びを通した学びの重要性を実感することが大事である。
- ・ 好奇心をもってやってきたことよりも、やらなければならないことしか評価されなくなると、子どものモチベーションが下がってしまうことは想像に難くない。

働き方改革の成果・さらなる方策について

- ・ 学校の健康診断を通して業務の仕分けと改善を徹底的に行った結果、時間外在校等時間は、岐阜地区で最も短くなった。これは大きな成果である。
- ・ 定期的な見直しなど、改善を続けていくことが大事だ。
- ・ 学校の事務職員は、校内でも基幹的な職である。学校経営により深く関わってもらうなど、働き方改革においてももっとクローズアップするべきではないか。

教員・教員組織のあるべき姿について

- ・ 教員の働き方を子どもたちはよく見ている。子どもたちの働き方のロールモデルとして、働くとはこういうことだと示せるようなものでなければならない。
- ・ 教員が自ら学ぶことは大事だ。子どもは、教員以外の顔もあることを魅力的に感じるものである。
- ・ 教員は弱音を吐いてはいけないという雰囲気があると思うが、困ったときは誰かに相談して一緒に解決してもよい。
- ・ 今いる教員が生き生きと働くことで、教育実習生や子どもたち等、教員を目指そうと考える人は増えていくのではないか。
- ・ 子どもたちの育ちが一番ではあるが、子どもたちが生き生きと学ぶためには教員が生き生きとしていなければならない、ということが我々の共通認識だと確認できたように思う。

働きがいをもつための方策について

- ・ 働き方改革と働きがい改革が両輪だという点は、まさにそのとおりだ。
- ・ 失敗しても、そこから学んで新たなトライをすることができる環境づくりが大事だ。
- ・ 研修に限らず、集まって話すことができる場や相談し合える場がもっとあるとよい。
- ・ 働く場としての環境整備が十分ではないと感じる。教育委員会と学校が、それぞれの権限に基づき、主体的に環境整備に取り組んでいく必要がある。
- ・ 授業研究等、好きな仕事に没頭しているときは幸せだと感じるものである。その時間こそが働きがいや生きがいにつながるものであり、そうした時間を持てる学校にしていく必要がある。
- ・ 教員自らの意思で参加できるサークルは少ない。こうした取組が教員の個性を伸ばし、教壇に立つときのアイデンティティーをつくることにつながると思う。
- ・ 教員が自信をもって子どもたちや保護者と接し、また職員室においても安心して過ごせるような仕組みを、教育委員会が責任を持って作っていく必要がある。
- ・ 効率を求めるがゆえに、ゆとりがなくなることもある。パフォーマンスを落とさないための、ゆとり時間を設ける必要がある。
- ・ 休憩室や食堂等、いわゆる仕事から離れた時間を過ごせる空間等、これからの学校施設を考えていく上で、そうした思想は大事である。
- ・ 職員室は、安らぎや心理的安全性、やりがいや楽しさを感じられるとともに、遊び心を持てる場であることも必要である。

不登校の未然防止について

- ・ 不登校も選択肢の一つだと捉えることは大事なことはあるものの、基本的には不登校の子どもたちを生まない学校づくりが大事である。
- ・ 学校の基本姿勢として、正解を探すのではなく、やってみて失敗し、そこから次の一步につながるものを学びとるという気持ちや姿勢を醸成していくことが必要である。
- ・ 本当のSOSをキャッチしたいのであれば、子どものちょっとした「伝えたい、聞いてほしい」という気持ちを否定的に捉えてはいけない。
- ・ 学校は、子どもが最初に出会う社会である。将来的なひきこもり防止の観点からも、その社会が寛容であるということが非常に重要である。
- ・ 失敗してもよいということを低学年から教えていくことが大事であり、学校はそれを許容する場でなければならない。
- ・ 好きなことや得意なことは人それぞれであり、それを認め、評価してもらえるような環境が学校にあるとよい。
- ・ 自分で選択できる機会が必要である。
- ・ 子どもたちにとって、自分と世界がつながっていることを実感できる機会は、とてもワクワクするものである。多様な大人と出会う機会があるとよい。
- ・ 子どもたちは子どもたちなりに様々なことを考えて選択しているのだから、そうした機会毎にしっかりと対話をするのが、子どもたちの学ぶ機会となる。問答無用で、あれをやりなさい、これをやりなさい、それはやっては駄目だといったものは、子どもたちにとって何の学びにもならないと思う。

不登校児童生徒への支援について

- ・ 子どもの特性やエネルギー状態によって、行ける場所は異なる。多様な居場所を用意する必要があると思う。草潤中学校や校内フリースペース、加えて実証段階であるオンラインを活用した支援等が用意されているのはとてもよいことである。
- ・ 草潤中学校や校内フリースペース、オンライン、あるいは民間フリースクールといった、多様な行き場所、居場所があるとよいと思う。学校もそうした選択肢のうちの1つという形でもよいのではないか。
- ・ オンライン支援のような、学校とは違った形の受け皿があると、子どもたちが自己肯定感を損なわずに済むと思う。
- ・ 多様な学びの場、選択肢を用意するのが我々の役割ではないか。
- ・ 公教育は、制度や仕組み、施設、人的配置等、様々なものがある程度決められているのだが、そこにどのようにして変動性を持たせるかが大事である。
- ・ 子ども本人への支援だけでなく、不登校の子を持つ親同士のつながりも非常に大事である。
- ・ 医療現場では、お子さんを継続的に診ていくので、特性や経緯、対応方法について、学校が持っていない情報を多く持っている場合がある。医療と教育が連携し、こうした情報を学校へフィードバックすることも重要ではないか。
- ・ 不登校の要因は本当に様々であるので、関係機関が総がかりで取り組んでいくことが必要である。
- ・ 居場所があること、認めてくれる大人や分かり合える仲間がいることは、子どもにとって必須なことだ。

指導者の確保・質担保の方策について

- ・ 部活動大好き教員の方には、地域移行後も大いに活躍していただけるとよい。
- ・ 大学と連携を図り、指導者の確保・育成の取組をさらに進めていただきたい。
- ・ 指導者確保のための人材バンク構築は必要なことである。
- ・ 経済界もこの大きな流れを理解し、地域の一員として、子どもを育てることに深く関わらなければならないという認識を持つ必要がある。
- ・ 近隣の大学やスポーツ協会、各種団体、兼職兼業で取り組みたい教員、スポーツ少年団、企業等、地域展開で連携できそうな組織は多いと思う。
- ・ スポーツ少年団の指導者は、日本スポーツ協会公認指導者資格の取得が必要となった。私の周りでも資格を取得された方が多くいらっしゃったので、こうした方々に指導者になってもらうことも考えられる。
- ・ 地域移行に伴って、子どもたちに関わる人は増える。そうした方々の質の担保も大事である。
- ・ 地域の方が指導する場合、子どもの理解に関する研修を受けていただくことや教員との情報共有の場を設ける等、子どもたちの特性や個性を理解し、個々の活動が充実したものとなるような工夫が必要である。
- ・ 地域移行後の活動においては、地域指導者も教育的視点を持ち、子どもの成長を丁寧に見取っていくことが必要である。
- ・ 指導者の質に関する責任は、各クラブの運営主体が負うべきものであるが、市全体として地域クラブの活性化を図るのであれば、市として重点的に取り組むべきである。

地域移行に伴う学校での学びの担保について

- ・ 中学生の成長に大きく寄与してきた部活動が学校から切り離された時、これを学校の別の活動でどのように補っていくかは難しい課題だ。学習指導の仕組みの中に、一人ひとりのよいところを伸ばせるようなプログラムを新たにづくらなければならないと思う。
- ・ 地域移行後は、学校に必修クラブを復活させるとよいのではないか。クラブ活動を通して学校でスポーツや文化芸術のよさをしっかり伝えると同時に、子ども同士が主体的に取り組む機会を保障するのである。

将来的な地域クラブの在り方について

- ・ 生徒だけでなく教員や親も多様な活動を自由に選択できる状況となるような仕組みを各地域で考えていく、というのがこの部活動の地域移行だと思う。
- ・ 地域クラブも個別最適化が必要である。今回の大きな流れを機に、週末の過ごし方を生徒それぞれが決められる環境づくりを進めていくべきだと思う。子どもたちが活動を選べるようなリストの作成もお願いしたい。
- ・ 生徒が主体的に過ごし方を選択できる仕組みが必要である。
- ・ 岐阜市の強みは、既に市長を中心に市長部局が関わっている点だ。こうした仕組みにより経済活動と結びつくことで、まちづくりの一つの形として機能していくことも考えられる。
- ・ ゆるい部活・地域クラブという選択肢があってもよいと思う。
- ・ 保護者のスタンスや各家庭の経済格差が、スポーツや文化芸術に親しむ機会を奪わないようにする必要がある。

ぎふMIRAI'sの意義について

- ・「ぎふMIRAI's」は、自分の原点、足元を確かなものにするのが最終的なゴールになっており、まさに自分自身を価値ある大切な存在だと思えることに直結している。効率的な教育を行うための学年やクラス、障がいの有無による分断の解消にもつながると思う。
- ・子どもたちが他者との比較ではなく、様々な体験の中で自分を知ることが大切であり、この学びの場こそが「ぎふMIRAI's」である。
- ・本物との出会いは、学校に来ていただくだけでなく、本場に行ってリアルに感じることも必要だ。本物との出会いを通じてアンテナが急激に伸びることもある。
- ・リアルな学びに価値があるという点については、学問的見地からこれまで論証され続けている。体験による経験の意義についても多くの研究がなされている。頭だけの学びは必ず頭打ちになる。

今後の展開について

- ・課題は、子どもたちが自発的な意思を持てるかどうかだ。2年目以降は、1年目の経験をどのように子どもたちの「やりたい」に繋げていけるかが大事である。各校でカリキュラムを作るにあたっては、その点を意識することが必要である。
- ・出発点は自らの問いでなくとも、取り組む中で出てきた個々の興味や関心をしっかり学びに繋げていくことが必要である。
- ・教員が負担と感じないためには、やらされるのではなく、自分たちで企画して取り組むという楽しさを実感することが大事である。教員がわくわくすれば、どこまでも探究は進んでいくものである。
- ・指導案やカリキュラムを緻密に作り上げるのではなく、子どもたちの興味や様子によって、進む方向が変わっていくことを理解した上で、伴走者として見守っていくことが大事である。

探究的な学びについて

- ・ 対話の文化は非常に重要であり、教育委員会から現場に対してしっかり発信してほしい。
- ・ 学びのスパイラルをしっかりとつなげていくためにも、対話の文化は必要である。
- ・ 子どもたちが、正解ではなく自分なりの確信や納得といったものを見つけることが大事である。
- ・ 対話というプロセスを経ることで、非常に深い部分が皆と共有されることになる。これによって、皆が同じ目線を持つようになり、結果としてチームは非常に強くなる。一緒につくることや対話の中で本質を言葉にし合うことで、自分事になっていくものである。
- ・ 教員がコントロールしていることが見えてしまう授業からの脱却が必要だ。子どもの興味関心を伸ばすという視点から考えると、教員は子どもたちが自由に取り組むことを認めつつ、個々の学びの状況に応じてサポートやコーチングをしていく伴走者としての役割を担うべきである。
- ・ 子どもが内から育つために自分たちはどのように関わればよいか、という点を共有することが非常に大事である。子ども観の共有がなければ、探究は決してうまくいかない。
- ・ 体験の中で疑問が自らの中に湧き上がってくるというシステムは、とても大事なものである。子どもたちは五感を通して学ぶべきである。小学校低学年では、体験をもっと重視すべきである。
- ・ 義務教育では、リアルの学びを何よりも大切にすべきである。